

〈成功者たちは、なぜ囲碁を愛するのか?〉

# 「政界の大ベテランと経済界の風雲児が語る 「囲碁の魅力と効用」

打った手(政策)に責任を持つ、姑息な挽回策は観戦者(有権者)がソツポを向く

## 碁打ちだからこそわかる「囲碁と政治の親和性」

囲碁は約2000年前に中国で成立し、奈良時代には日本に伝わっていたようです。『源氏物語絵巻』には、十二単姿の女性が碁を打つ姿が描かれていますから、平安時代には宮中での嗜みとなっていました。

織田信長も豊臣秀吉も囲碁を打ち、徳川家康は囲碁を国策として保護した。江戸幕府が囲碁の家元として本因坊家、井上家、安井家、林家の4家に扶持を与え、年に一度、その4家が將軍の御前で競い合ったのが「御城碁」です。御城碁の棋譜(分局記録)は540局ほど残っていますが、その技量は現在のプロ棋士より上ではないかとさえいわれています。歴史が古いことに

加え、時の為政者が奨励した「政策」でもあったわけです。その意味では元来、政治との親和性が高いゲームだったといえるでしょう。

囲碁は「盤面の1か所だけを見ていると負ける」というゲームです。局地戦では対等に張り合っていると思っているにも、上手はいつの間にかその周囲で有利な状況を作り上げ、下手は「あっ」と気づいた時にはもう劣勢になっている。

政治も「大局観」が重要です。一つ一つの政策に丁寧に取り組むことは大事ですが、それが他の政策ときちんと連関し、整合性を保っていないといけないので

与謝野 馨 (衆議院議員)

すから。

碁では、対局の途中で勝敗がハッキリと見えてくる  
ことがあります。そんな時にブルブル引き延ばすよう  
な負け方は相手に失礼にあたる。きちんと「投げ場投  
了する時期」を自らつくり、潔く身を引く。言い訳を  
繰り返したり、勝機がないのにコソコソと挽回を試み  
て負けの幅を小さくしたりするような打ち方は、対戦  
相手だけでなく、観戦者にとっても気持ちのいいもの  
ではありません。政策の失敗を屁理屈や見苦しい言い  
訳で取り繕う政治が、国民からソッポを向かれるのも  
同じでしょう。

常に冷静な判断を重ね、次の一手をどこに打つか決  
める。そして打った石は絶対に打ち直しはきかず、そ  
の後始末は自分でしなくてはならない。政治家として  
どんな手(政策)を打つてもいいですが、決断して打つ  
た手については、政治家自らが責任を取らないといけ  
ません。それが「政治主導」なんです。ところが、昨  
今の政治の現場では「打ち直し」や「待った」がまか  
り通っている。囲碁をやつていけば、そんなルール違  
反は絶対やつてはいけないことだとわかるはずなんで  
すけどね。

### 石田三成が関ヶ原で徳川家康に敗れた理由

現在の政界で囲碁といえば、私と小沢一郎さん(民  
主党元代表)の対局がよく話題になってきました。やれ  
大連立の下交渉だとか、やれ政界再編の布石だ……と  
かね(笑い)。

そんな憶測をしたがる方々の気持ちもわからないで



はないですが、小沢さんとの対戦は純粹に「碁敵」の  
勝負なんです。碁を嗜む若い政治家もいますが、現在  
の永田町で私と棋力が同じくらいの方は小沢さんだけ。  
公開対局は残念ながら連敗中ですが、次は是非とも勝  
ちたいと思います。

それにしても、小沢さんは実に研究熱心。数年前の  
ことですが、議員会館で会った時に小沢さんが「日曜  
の囲碁番組だけが楽しみなんだよ」と話していた。そ  
こで「CS放送で囲碁の専門チャンネルがあるんです  
よ」と、加入方法を教えてあげたんです。それから半  
年後ぐらいに、「加入しましたか?」と聞いたたら、「入  
ったのはいいんだけど、見過ぎて腰を痛めちゃった」  
って(笑い)。

小沢さんとは政敵である時期が長いですが、それだ  
も私は小沢さんが大局観を持ち、自分の掲げた政策の

よさの・かおる/1938年、東京都生まれ。東大法学部卒業後、中曽根康弘氏(元  
首相)の秘書などを経て、76年衆院選で初当選。以降、文部大臣、通産大臣、内  
閣官房長官、財務大臣などを歴任。現在は無所属。大竹英雄・九段ら多くのプロ  
棋士の指導を受け、約30年間にわたって政界の棋力ナンバーワンの座にある。

責任を取る政治家であると思っています。それは本当の碁打ち同士だからこそわかりあえる感覚なのかもしれません。

囲碁は何歳から始めても遅いということではなく、それぞれが楽しめるゲームです。何といってもルールが非常に簡単です。碁盤や碁石はピンからキリまであるとはいえ、安価なものを揃えればお金もかからない。

麻雀は相手を3人見つけなくてはいけません、囲碁は相手を1人だけ見つけければいい。碁会所に行けば、まったく知らない人とでもすぐに対局できます。最近ではネット碁が普及してきたので、世界中の碁打ちと交

流することもできて楽しいですね。私も合間を見つけては対局に励んでいます。

麻雀は何百回一緒にやっても、その相手となかなか仲良くならない(笑)。でも、囲碁は一度対局したただけで仲良くされる。利害関係のない友達をつくることができるんです。

余談ですが、戦国時代に囲碁を嗜まなかった数少ない人物が石田三成だったといわれています。その三成が碁を愛した家康に関ヶ原で敗れたのは必然だったと思えてならないのは、碁好きの穿った考えかもしれませんがね(笑)。

## 電光石火の天下統一を目指した織田信長は、囲碁に多くの時間を費やした 若手経営者よ、日本経済活性化のために囲碁を打とう

囲碁を始めたのは40歳から。「不惑」という境地になれるよう、何か新しいことを始めてみようと考え、囲碁を選択したのです。選んだ理由は織田信長が好きだったから。短期間で天下統一を狙った人物ですから、囲碁などやっている暇などなかったように思えるのに、実はかなり頻繁に打っていたようです。信長がなぜ囲碁に熱中したのか、それをぜひ知りたいというのが大きな理由でした。

どうせやるなら中途半端ではなく、1年で初段を目指そう。そう決意したうえでどっぷりと時間を使って猛勉強し、11か月で初段の免状をもらいました。

その過程で、信長が囲碁に傾注した意図がわかったような気がしたのです。信長は戦のシミュレーションをするために囲碁を打っていたのではないかと、

総大将として自分が意思決定をし、敵を攻略するために次の一手を打つ。その際に読みが浅かったり、甘い判断をしたりすれば負ける。戦では一つのミスでも命取りになりかねない。そう考えてミスを反省しながら繰り返し打つ中で、戦の感覚を研ぎ澄ましていったのではないかとというのが僕の仮説です。

戦国時代の戦は刀を交えたわけですが、現代での戦争はやはりビジネスの勝負です。その点で、囲碁は経

堀 義人 (グロービス経営大学院学長)

芸術にも非常に近いものがあると実感しています。

まず、一手ずつしか打てないこと。経営も一度にたくさんの方のことをやるうとすると戦略を失う。囲碁では「捨て石（わざと相手に自分の石を取らせるかわりに、その間に自陣を増やしたり、相手の大石を取ったりすること）」という戦法があります。経営戦略というのは「選ぶこと」ではなく「捨てること」なんです。

囲碁でも経営でも、一つを選ぶ際には冷静な判断をしないといけない。常に頭をクールに保って冷静な判断を心掛け、状況を見て、自分の意思決定をしていく。状況を冷静に睨みながら、どんな手が必要なのかを判断して、囲碁の場合は石を打つ。経営の場合は言葉で指示を出すというわけです。

### 「定石」を知らずしてビジネスでは勝てない

囲碁では必然性のない手は「悪手」といわれます。経営者というのはどうしても、これもやっておいた方が安心できるだろうと必要のない手まで打ちがちですが、そうした経営判断はやはり「悪手」なんです。無駄を絞り込んだ経営の感覚こそが重要なのです。腕前を上げる方法もよく似ています。徹底的に過去の棋譜に触れて、自分だったらどう打つだろうと議論していくことが、囲碁の一番の上達の道といわれています。

ハーバードのMBAの授業では、過去の事例をテーマにして「自分だったらどうするか」を議論している。それを繰り返すことで過去の多くの成功事例を身につけ、自分なりの経営者観を見つけているのです。囲碁には



「定石」があつて、それを踏まえないければ強くなれません。先人の知のパッケージをどう活かすかが大切なんです。経営術にも、「マーケティング」や「ファイナンス」といった定石があり、それらを知らなければビジネスで勝てないのです。

これほど経営者にとって有用なゲームなのに、日本の若手経営者で囲碁を嗜む人は非常に少ない。これは損をしている人が多いということです（笑い）。確かに忙しいのかもしれないが、信長が打っていたことを考えれば時間は何とかなるはず。あまりに残念なので、私は若手経営者に囲碁の啓蒙活動を始めました。

日本経済の活性化のためには、経営者の「経営力」を上げることが不可欠です。そのためには日本の若手経営者に囲碁を打ってもらおうのが早道だと考えているんです（笑い）。

ほり・よしと／1962年、茨城県生まれ。京都大学工学部卒、ハーバード大学経営大学院修士課程（MBA）修了。住友商事を経て起業し、06年にはグロービス経営大学院を創設。同大学院学長として「企業家リーダーシップ」科目で教鞭を執る。5人の子供も碁を打ち、少年少女囲碁大会などで活躍している。